

わからなさを包む、夜の美術館

——ワークショップ「誰もいない美術館で」——

塚田美紀（世田谷美術館学芸員）

美術館とは、どんなところだろうか

美術館は、美術作品が置いてある場所である——間違いではない。しかし誰かが見に来ることなしには、作品も美術館も成立しない。美術館は、人が、美術作品を見に来る場所である（何が「美術」なのか、という問題はひとまずおいておく）。そしてこの「人が」「（美術）作品を」「見る」という現場は、実に興味深い。息をひそめ、周囲の観客や監視員に気兼ねしながら、（本当はつまらないのだけれども）一心に見つめてみたり、ごくまれに深々と胸に刺さるような作品に遭遇して立ちつくしたり、自分には理解できない、と傷つけられたようにうつむいたりする。いろんな出会いのドラマが生まれているのだけれども、たいていそれらは誰にも知られず幕を閉じる。だがその想念とも怨念ともいべき出会いの場の「念」は、確かにそこに渦巻いているのである。

その人々の「念」を、かたちにしてみたらどうなるのか。見たことをお行儀よく感想文に書く、ということではなく、ダンスや演劇や音楽という方法で、全身で表現してみたらどうなるのか。そういうことを、ふだん美術館に来ないような、突拍子もないことをしでかしてくれそうな10代の子たちとやってみたい。どうせなら最後に、作品のある空間で発表したらいい。閉館して誰もいなかった時、展示室でこっそりやってみようか……。こうして世田谷美術館のワークショップ「誰もいない美術館で」が始まった。

1回2日間で、年に4回、この5年で20回実施し

てきた。中学生の時から参加し始め、もうすぐ高校を卒業するという男の子、高校生の時に参加し、大学生になってワークショップの手伝いに来てくれる女の子、いろいろな人がいる。10代以上の人たちにも参加を呼びかけたら、これまた様々な大人が集まってきて、2日間のワークショップには毎回、ちょっと不思議な、大きな家族のような雰囲気が漂っている。

世田谷美術館は、開館以来20数年にわたって、さまざまな教育プログラムやワークショップを試みてきた館である。造形ワークショップのみならず、現代音楽の講座や、子どもたちと演劇をつくるという異色のシリーズも過去にはあった。「美術」の枠にこだわらない方が美術館が面白くなる——そんな館のDNAを受け継ぎ、「誰もいない美術館で」の企画には、演出家の柏木陽さんに参加していただいている。そして毎回いろいろなパフォーマー（ダンサーやミュージシャンなど）をゲストに呼び、彼らが展示作品を見てやりたいと思ったことを手がかりに、各回のワークショップを具体的に組み立てる。学芸員と演出家とパフォーマーがいて、そこに毎回公募の参加者たちが集まってきて、展示会場と美術作品を使って、ダンスとも演劇とも音楽ともつかない何かをつくっていく。

……というような説明は、非常にわかりにくい、とよく言われる。このワークショップにあまりにも多くの要素が絡んでいるからだろうか。そもそもの出発点である、人と作品が出合っている場の「念」などという、つかみどころのないものを相手にしているからだろうか。いや、もっと単純な理由かもしれない。美術



岡本太郎の絵になる



横尾忠則の温泉の絵を、くつろいで見る

作品を使ってダンス？ そんなことをしていったい何がわかるんですか？ と、不思議、ないし不審に思った他の美術館関係者が、ワークショップの見学に来たことがある。結局、見学ではなく参加したその人はこう言っていた。ふだん作品を見る時、自分と作品は「対峙」という関係にある。「いい作品」かどうかを「判定」する姿勢でいる。ところが、このワークショップでみんなと体を動かしてヘトヘトになって展示室に行くと、ふだんの自分が弱っているからか、作品にすうっと入り込めて心底驚いた、と。対峙もしない、判定もしない、美術館でただ真っ平らに、「自由に」作品を見るなどということは、たとえ関係者であってさえ（であるからこそ、かもしれないが）、そうそうできないのが現実なのである。

演出家の柏木さんの説明はこうだ。「美術の価値をわかるために美術作品を見ましよう、っていくら言ったって、美術に関心のない人には届かない。だけど、このワークショップみたいに、美術を使ってダンスや何かをつくるとなったら別です。『自分のために使う』となると、初めていろいろ見えてくる。僕もそうです。僕は演出家だから、美術作品を使ってどれだけおもしろいドラマをつくれるか、という視点で毎回関わってきた。美術業界での作品の価値付けは、僕には関係ない」。かくして、常識という名の圧力や権威の匂いに敏感な10代の人たち（そしてそれ以上の大人たち）は、自由を求めて、自力で何かおもしろいことを見つけたくて、このワークショップに集まってくる。

ワークショップの構造は単純だ。展示を見ることと、柏木さんやゲストと一緒に身体や音や言葉で遊ぶこと、そのゆったりとした繰り返しのなかで、参加者各自がやってみたいことを探す。すると、毎回いろいろなことが起こる。さまざまな展覧会を使い、いろいろな人

間が来るのだから当たり前だ。例えばある時、ゲストのダンサーが「私、この展覧会の作品では踊れない」と言い出した。作品からはたくさんを痛いほど感じるのに、それがどうしても動きとして体から出てこない、ごちなく縛られたみたいだ、と。それを聞いた柏木さんは、「踊りたくても踊れない作品のある展覧会」というところからワークショップを始めた。

この時には、展示作品は好きなのだが、人と関わったり身体表現をするのが怖い（にもかかわらず思いきって来た）と言う若者もいた。終始迷い、人にも相談し、結局その若者は発表会の時、他の人がそれぞれに踊るなか、展示作品の前でじっとうずくまっていた。その姿には凜とした説得力があった。誰もが自分の感覚に正直になっていい、ということが本当に掛け値なしに保証され、そのなかで自分や作品と向き合った結果としての表現には、有無を言わせぬ力が宿るのである。発表会を見た人のなかには「みんなプロかと思った」と驚く人もいる。そこで目撃されているのは、美術作品を使った巧みな自己表現というよりは、美術作品が映し出す一人ひとりの真実の佇まい、というべきものなのだと思う。

こんな説明は多分、ますますわかりにくいのだろう。最後に10代の参加者たちの声を聞いてみよう。「なんか、あの雰囲気が好き」、「だいたいいつも変な人が来てて面白い」……これもどうもはっきりしない。「何をやってるのか、自分でも毎回よくわかんないんすよ」とも。わからないけれど、彼らはまた来るのである。誰もいない美術館で、わからない何かに出会いに。そんなふうに、わからなさをそっと包み込む場として、美術館はきっと、この上なくふさわしいところなのだ。かくして、わからないことだらけのワークショップは、これからも続いてゆく。



みんなでパフォーマンスをつくっていく



誰もいない夜の美術館は、不思議な夢の中のよう

※この見聞きの写真撮影：馬場菜穂